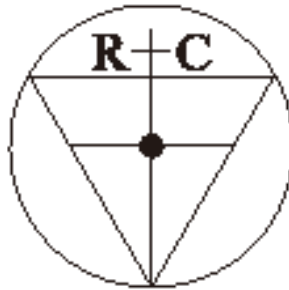




宣言書 MANIFESTO



バラ十字友愛組織の姿勢
Positio Fraternitatis Rosae Crucis

著作権：2001年、バラ十字会AMORC世界総本部
発行：バラ十字会日本本部AMORC

前書き

FOREWORD

親愛なる読者のみなさん、

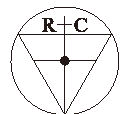
あなたに直接お伝えする方法がわからなかったので、この宣言書（マニフェスト）を通して私たちの思いをお伝えすることにします。あなたが心を開いてこの宣言書をお読みくださり、少なくとも何かを感じていただけることを私たちは願っています。私たちの願いは、この宣言書「バラ十字友愛組織の姿勢」に完全に同意していただくことではなく、何にも束縛されることなく、あなたとこの宣言書を共有することです。もちろん私たちは、この宣言書があなたの心の何かに触れることを願っています。しかし、もしもそうでなくても、どうぞ寛容な心で受け入れてください。



1623年、バラ十字会はパリのあらゆる場所の建物の壁に、好奇心をそそる謎めいたポスターを貼りました。それにはこう書かれていました。

「私たち、すなわち〈バラ十字の高位の大学〉の評議員は、見える方法でも見えない方法でもこの街に滞在しているが、それは〈正義の人〉が心を向ける〈至高の存在〉の恵みのおかげである。滞在を選んだ国々のあらゆる言語を話すことができることを、書物も符号も使うことなく、私たちは実演し、教授するが、それは友人を死の過ちから救い出すためである。」

「ただの好奇心から私たちに会おうとする人は、決して私たちを見出すことはない。しかしもし、私たちの友人として登録されることを、その人が真剣に願っているならば、その意志を審判する私たちは、この街での集会の場所を知らせることはしないが、私たちのなす約束の真実をこの人が見られるようにする。なぜなら、探究者が真の望みを持って願うならば、その思いは私たちを彼のもと

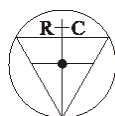


へ、そして彼を私たちのもとへと導くからである。」

この数年前、それぞれ 1614 年、1615 年、1616 年に発行された「バラ十字友愛団の声明」、「バラ十字友愛団の信条告白」、「クリスチャン・ローゼンクロイツの化学的結婚」という現在でも有名な三冊の宣言書の出版によって、バラ十字会は既に世間に名を知らしめていました。当時、この三冊の宣言書は、知識階級の人々だけでなく、政治の世界や宗教界の高い地位の人たちにも多くの反響を呼んでいました。1614 年から 1620 年の間に、およそ 400 もの小冊子や、写本や、書籍が出版されました。そのうちのあるものは、三冊の宣言書を称賛し、あるものは非難するものでした。このことを見てもわかるように、この三冊の宣言書の出版は、歴史的に重要なできごととなりました。秘儀的な側面を持つ思想の世界においては、特にそうでした。

一冊目の「バラ十字友愛団の声明」(Fama Fraternitatis) は、当時の政治的指導者や宗教的指導者、そして科学者に向けられたものでした。ヨーロッパの全般的な状況についてはかなり否定的な見解を述べている一方で、クリスチャン・ローゼンクロイツ (1378-1484) の比喩的な物語を通して、〈バラ十字会〉の存在をこの書は明かしていました。この物語は、〈バラ十字友愛団〉を誕生させる以前のローゼンクロイツの世界中への旅で始まっており、彼の墓が発見されるところで終わっています。この宣言書は、その時すでに〈全世界的な改革〉を求めて叫んでいました。

二冊目の「バラ十字友愛団の信条告白」(Confessio Fraternitatis) は、一方では人類と社会を再生させることの必要性を主張し、もう一方ではその再生をなし遂げることのできる哲学的知識を〈バラ十字友愛団〉が有していることを指摘して、第一の宣言書を補っています。この書は主として、バラ十字会の活動に参加することを望み、人類の幸せのために

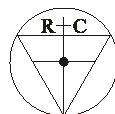


力を尽くしたいと願っている探究者たちに向けて書かれたものです。この文書の予言的な側面は、当時の学者たちの興味を大いにそそりました。

三冊目の「クリスチャン・ローゼンクロイツの化学的結婚」(Chymical Wedding of Christian Rosenkreutz)は、先の二つの宣言書とは幾分異なる形式で書かれており、〈啓発〉への探究を描写した入門儀式を象徴する旅を物語っています。その七日間の旅の大部分は、謎めいた城を舞台にしており、その城ではある王と女王の結婚式が行われることになっていました。〈入門者〉のソウル、つまり魂を花嫁になぞらえ、〈創造主／神〉を花婿になぞらえて、ソウルと〈創造主／神〉が結び合うことができるように〈入門者〉を導いてくれるスピリチュアルな発達のことを、「クリスチャン・ローゼンクロイツの化学的結婚」は象徴的に物語っていました。

当時の歴史家や思想家や、哲学者たちが力説していたとおり、これら三冊の宣言書の出版は非常に重要であり、時機を得た適切なものでした。ヨーロッパが政治的に分断され、経済的利益をめぐる争いによって引き裂かれ、深刻な存在の危機を体験していた時期に、これらの宣言書は発行されました。宗教戦争は不幸と荒廃の種を蒔き、家族の間にさえ分裂を生じさせていました。そして科学は急速に発達しつつあり、すでに物質主義の傾向を表していました。大多数の人々の生活は惨めなものでした。当時の変わりゆく社会は、徹底的な転換の最中にありましたが、一般の人たちの利益のために発展するという指針を欠いていました。

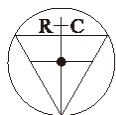
歴史は繰り返します。同じできごとが周期的に再現され、しかも以前よりも大きなスケールで再現するものです。そして、最初の三冊の宣言書の発行から、ほぼ5世紀を経た現代において、世界全体、特にヨーロッパでは、政治、経済、科学、テクノロジー、宗教、道徳、芸術といったあらゆる領域で、前代未聞の存在の危機に直面していることに気づかされます。そのうえ、私たちが暮らしそこで進化しつつあるこの惑星は、重大な脅威に直面しており、比較的最近の科学である生態学の重要性を上昇させています。現代の人類には何の問題もないとは言えません。そこで、現代の〈バラ十字会〉は、私たちの〈伝統〉と〈理想〉に忠実に従い、この宣言書「バラ十字友愛組織の姿勢」



を通して、この危機を訴えることが賢明であると考えました。

この宣言書「バラ十字友愛組織の姿勢」は、いわゆる終末論的な論評とは一線を画すものです。また、決して黙示録のようなものでもありません。先に述べたように、この宣言書の目的は、今日の世界の状況に関する私たちの見解を述べ、その未来を私たちが憂えていることを明らかにすることです。私たちのかつての兄弟たちが、当時既に行っていたように、私たちもまた、これまで以上に「ヒューマニズム」と「精神性」を訴えていきたいと考えています。というのも、現代社会に広がっている個人主義と物質主義では、人々が当然の権利として望んでいる幸せを人間にもたらすことはできないということを私たちは確信しているからです。この宣言書を人騒がせに思う人たちもいることも確かでしょう。しかしこのような格言があります。「自分の意志で聞くことも、見ることもしない人よりも、耳も聞こえず、目も見えない人がいるだろうか。」

今日の人類は、悩み苦しみ、混乱しています。物質的に大きな進歩を遂げてきましたが、それによって本当の幸せはいまだにもたらされてはいませんし、穏やかな未来を予見することもできないでいます。戦争や飢饉、伝染病や生態系の大変動、社会的危機や基本的自由に対する攻撃などは、現在も続いている多くの悲惨なできごとのうちのほんのいくつかにすぎません。そして、それは人間が未来に対して抱いている希望とは全く相反するものなのです。耳を貸していただける方に向けて、このメッセージを書こうと私たちが考えたのはこうした理由からなのです。このメッセージは、17世紀のバラ十字会員たちが、最初の三冊の宣言書で表現したメッセージと同じ伝統の下にあります。しかし、そのメッセージを理解するためには、歴史という偉大な書物を現実主義に基づいて読み解き、人類に関して明確な見解を持たねばなりません。つまり、今も進化の途上にある男女から構成されている偉大な人類という集団に関する見解です。



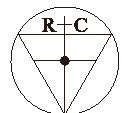
バラ十字会の姿勢

POSITIO R + C

この人生に関わるすべてのものや、宇宙そのものと同じように、人は常に進化しています。これは目に見える世界のあらゆるものに共通する特徴です。しかし、人間の進化は、存在の物質的な側面だけに限られているのではないと私たちは考えています。私たちにはソウル（魂）があること、つまりスピリチュアルな側面があることを私たちは確信しています。私たちに伝えられている知識によれば、ソウルによって私たちは意識を持つ存在となり、自分自身の起源や宿命について思索することができます。したがって、人間の進化はひとつの目的であり、精神性はひとつの手段であり、時間は啓発に導いてくれるひとつの要素であると、私たちは考えています。

歴史を理解させてくれるのは、歴史を織りなす個々の事件ではありませんし、歴史が生み出した個々の結果でもありません。むしろそれぞれの事象を貫く関連性によって、歴史を理解することができるのです。それに加えて、歴史にはより大きい全体的な意義があるのであって、歴史の全体的な流れの中で、ひとつひとつのできごとを理解する必要があるということを今日の歴史家たちの大部分が認めています。つまり、正しく歴史を理解するためには、あるできごとを単に独立して起こった事件として考えるのではなく、より大きな全体の一部分として、注意深く考察しなければなりません。ひとつのできごとは、より大きな全体の一部分であり、全体との関係を考えることによってはじめて、本当の歴史的な意味がわかると私たちは考えています。ひとつの事件をより大きな全体から分離して考えることや、いくつかのできごとを取り除いた歴史から教訓を作り出そうとすることは、知的な偽善です。ですから、連続して起こったり、近接した場所で起こる事件、同時発生した事件など、どれひとつとして、本当に偶然に起こっているものはないと考えられます。

序言で述べたように、現在の世界の状況と 17 世紀のヨー

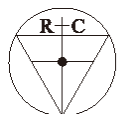


ロッパの状況は類似していると、私たちは考えています。人々が「ポストモダンの時代」と呼ぶ高度な資本主義は、現代の生活の多くの部分にかなりの影響をもたらしており、不幸にも、人間の墮落を引き起こしました。しかし、このような墮落はほんの一時的なものであり、ひとりひとりにも人類全体としても再生が訪れるに違いないと私たちは考えています。しかしそれは、人類が「ヒューマニズム」と「精神性」という方向性を未来に与えるならばという条件付きでのことです。もしそうしなければ、現在直面している問題よりもはるかに深刻な事態に、まさに身をさらすこととなります。

バラ十字会の存在論の観点から、地球上で生きている全ての生き物の中で、人間が最も進化していると私たちは考えています。この地位にふさわしくない恥ずべき振る舞いを、たとえ人間がしばしば行っているとしてもです。

人間がこの特権的な地位にあると主張する理由は、私たちには自己を認識する力と自由な意志が授けられているので、自身が選ぶとおりに人生を考え、方向付けることができるからです。また、ひとりひとりの人間は、全人類というひとつの体を構成する細胞のひとつひとつであると私たちは考えています。この原則に基づいて、生まれた国や住んでいる国家に関係なく、すべての人間が同じ権利を持つべきであり、同じ敬意が払われるべきであり、同じ自由を享受するべきであるというのが、私たちの「ヒューマニズム」の考え方です。

「精神性」に関する私たちの考え方の基礎となっているのは、ひとつには〈創造主／神〉（注）が〈絶対的な知性〉として存在しており、宇宙とそこにある全てのものを創造するという確信であり、もうひとつは、ひとりひとりの人間には、〈創造主／神〉を源とするソウルがあるという確信です。



（注：一般に「創造主」、「神」と呼ばれている知性によって、この宇宙の秩序が説明されるという考え方にバラ十字会は同

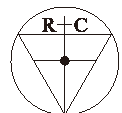
意していますが、この存在は人格ではないと考える点と、信仰に基づくのではなく、その性質を科学的に探求しようとする点で、バラ十字会の考え方は宗教とは異なっています。)

さらに、創造されたもの全ての中に、〈創造主／神〉はさまざまな法則を通して表現されており、より素晴らしい善をなすために、その法則を学習し、理解し、尊重しなければならないと私たちは考えています。さらに、人間は〈創造主／神〉の定めた計画の実現に向かって進化しており、人間は地球上に理想的な社会を創造することを宿命づけられていると私たちは考えています。この精神主義的なヒューマニズムはユートピア的な空想だと思われるかもしれませんが、しかし、プラトンが著作の「国家」(The Republic) の中で述べている以下の言葉に、私たちは同意しています。「ユートピアが理想的な〈社会〉の形態である。おそらくそれをこの世でなし遂げるのは不可能であろう。しかしユートピアにこそ、賢明な人はすべての望みを置かねばならない。」

この歴史の転換期において、人間が再生する可能性はかつてよりも高まっていると私たちは考えています。そのような意識が共通化してきていること、国際的な交流が一般的になってきたこと、異なる文化圏の交流によって豊かな成果が生み出されていること、情報の国際化が進んでいること、異なる分野の学問にまたがる共同研究の発展などがその理由です。しかし、このような再生は個人と人類全体の両方で起こるべきであり、それはあらゆる意見や可能性を検討し、最適な選択をすることと、その自然な結果として生まれるはずの寛容によってのみもたらされると私たちは思っています。政治制度や宗教や哲学や科学のいずれにも、真実に対する独占権はありません。しかし、それぞれの分野が人類のために提供すべき非常に重要な要素を、人類が共有することができるならば、私たちは真実に近づくことができます。それはつまり、多様性を通してひとつになることを求めることへと戻っていくことになりま

す。

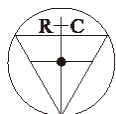
人生の移り変わりを実感することで、遅かれ早かれ、私た



ちはこの地上での自分自身の存在の理由を思索するように導かれます。このように存在の理由を探究することは、ごく自然なことです。というのも、そのような探求は人間のソウルのうちの欠くことのできない一部分であり、私たちの進化の基礎となっているからです。さらに、歴史に大きな足跡を残したできごとは、その事実が存在したというだけでは正しいと証明されるわけではありません。そのためには、単なる存在を超える、そのできごとが起きるに至った高い次元の理由が必要です。この「存在理由」(レゾンデートル：raison d'être)に突き動かされ、人間は人生の神秘について自問するようになり、スピリチュアルな道を進むことになると私たちは考えています。つまり、進化の途中のある時点において、人々は神秘学と「真実の探求」に対して、関心を抱くようになるのです。私たちはこうも考えています。真実の探求が当然のものであるとすれば、人間には、自身の本質から発せられる命令によって、そして、生き延びようとする生物としての本能によって、希望を心に抱き、ものごとを楽観的に考える力が与えられています。ですから、物質的な限界を超えたいという強烈な願いは、人類が生きていくために不可欠な要素であるように思えるのです。

政治について

ここからは、それぞれのテーマについて私たちバラ十字会の見解を述べていきます。まず政治に関しては、現在の政治システムを完全に一新することが絶対に必要であると私たちは考えています。20世紀の主要な政治モデルの中でも、マルクス・レーニン主義と国家社会主義(ナチズム)は、当時はおそらく最も信頼がおけるとされていた社会的思想背景に基づいていましたが、理性の衰退とそして最終的には野蛮な社会状態をもたらしました。この二つの全体主義的なイデオロギーは、当然のことながら自分自身について決定する権利を求めることに反することになり、その結果人間が自由を求める権利を否定し、同時に歴史の最も暗い

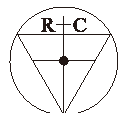


数ページを書き出したのでした。やがて歴史は、このふたつのイデオロギーが不適格であると宣言しました。この決定が

永遠であることを望みましょう！ 単一の画一主義的な観念に基づく政治的システムは、どんなものであっても、“救済の教理”を人々に押しつけようとするという点で、多くの場合共通しています。ここでいう“救済の教理”とは、人々を不完全な状態から解放し、楽園のような状態に上昇させようという考え方です。加えて、このような政治システムの大部分は、国民に対し、考えることではなく信じることを要求します。そのような政治システムは結果的に、人々を“どの宗派にも属さない宗教”に結び付けることとなります。

それとは逆に、私たちバラ十字会の考え方は、単一主義的ではなく、誰にでもオープンで、しかも多元的な見方をするものです。言い換えると、他者との対話を奨励し、人間関係を深めようとするものです。同時にバラ十字会の思想は、ものごとには見解がいくつもあること、人々の行動様式は当然ながら多様であることを受け入れています。そのような思考の方法は、意見の交換や、相互に影響を与え合うこと、そしてときには矛盾によってさえ育てられていくものです。しかし、全体主義的なイデオロギーは、そのようなやり方を禁じたり、避けたりしています。このような考え方の相違から、全体主義的な政治システムには、さまざまな性質のものがありましたが、常に一貫してバラ十字思想を拒絶してきました。私たちの友愛組織は創設された当初から、個人が自分自身の観念を自由に形成し表現する権利を提唱してきました。この点で、バラ十字会員は必ずしも自由思想家ではありませんが、全員が自由に思索しています。

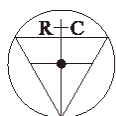
今日の世界の状況を見ますと、本当の民主主義は、弱点が全くないと言うわけではありませんが、それでも今なお政治の最良の形態であると思われれます。思想と表現の自由に基づいた真正な民主主義においては、一般に、治められている側の人々の間にも、国を治めている側の人々においても、多種多様な傾向があります。残念なことに、このように多様であることで、しばしば分裂が起こり、その結果としてさまざまな論争を引き起こされます。悲しいことです



が、そのために、ほとんどの民主主義国家で分裂が起こり、分裂した勢力は絶えず衝突し、ほぼ組織的に互いに敵対しています。このような政治的な対立は、たいていの場合多数派と反対派という両極端に人を引きつけてしまうことが多いのですが、もはや現代社会にとってふさわしいものではなく、人類の再生を阻害しているように私たちには思えます。国家の政務を運営管理することのできる非常に有能な人材を集め、総合的な統治機関を創設するためには、各々の国家が協力することが理想的です。さらに言えば、いつの日にか、すべての国家を代表する全世界的な規模の政府ができることを、私たちは望んでいます。現在の国際連合は、ちょうどその萌芽なのかもしれません。

経済について

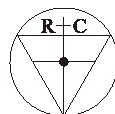
経済に関しては、世界の状況は完全にさまよっている状態だと私たちは思っています。経済システムが、ますます人間の活動に影響を与えるようになっていくことを誰もが理解しています。そしてこれは日常なことになりつつあります。今日のように経済が社会を支配している状況によって、社会のネットワーク構造の形態が相当な影響を受けています。そのため、その表れ方はさまざまですが、社会構造が経済にコントロールされています。他方、今日の経済は明確な評価に従って機能しており、それらの評価は、以前にも増して定量化が可能となっています。そのような評価には、生産コスト、損得分岐点、利益の評価、労働時間等々があります。これらの評価は、現在の経済システムにとって基本的なものであり、目的をなし遂げるための手段をシステムに提供しています。しかし不幸なことに、その目的は基本的に物質主義的なものです。なぜなら、その目的は、過度に利益を上げ、資産を増やすことに根ざしているからです。このようにして、現在では、人間が経済に奉仕するかのようになっていますが、本来は経済が人間に奉仕するべきなのです。



今日すべての国家は、全体主義的であるとも言える世界規模の経済システムの属国であるかのようです。この経済的な面での全体主義は、何億人もの人々の最も基本的なニーズす

らも満たしてはいません。その一方で、通貨の供給は、かつてこれまでになかったほど、世界規模の膨大なものになっています。このことは、産み出された富が少数の人々だけに恩恵を与えていることを意味しています。私たちはそれをとても残念に思っています。また、最も裕福な国家と最も貧しい国家との不均衡が止まることなく拡大しつつあることに私たちは注目しています。各国の最も貧しい階層と最も恵まれた階層との関係にも、格差の拡大という同様の現象を見ることができます。その理由は、経済があまりにも投機的なものになってしまったために、現実の市場や利益ではなく、むしろバーチャル（仮想現実的）な市場と利益を、経済が供給しているからであると私たちは考えています。

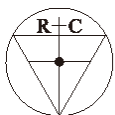
疑いもなく明らかなことですが、人類全体のために役立つときにだけ、経済はその役割を十分に果たすことができます。このことから私たちは、お金というものが本来どうあるべきかという考えに導かれます。つまり、お金とは、人々が物質的な世界で幸せに暮らすために必要としているものを、全ての人に供給するための交換の手段であり、エネルギーであるという考え方です。そのように考えるならば、貧しいことや、ましてや貧困に窮することが宿命である人は、人類にひとりもいないことを私たちは確信しています。その反対に、人間としての幸せのために役立つすべてのものを持つように定められており、その結果、完全な心の平安を得ながら、より高いレベルの意識に向けて自身の精神を向上させることができるようになると考えています。絶対的な意味で、もう貧しい人々は存在せず、すべての人々が物質的に満足できる状態を享受するように経済は用いられなくてはなりません。なぜならば、それが人間の尊厳の基本だからです。貧困は宿命ではありません。ましてや、天が下す命令の結果でもありません。一般的に言って、貧困は人間の利己主義の結果です。ですから、共通の利益を共有し、配慮することに基礎を置く経済システムが確立される日が来ることを私たちは望んでいます。しかし、地球の資源は無尽蔵ではなく、無限に分け合うことはできません。ですから、人口過剰な国では特に、出生率をコントロールしなければならなくなることは確実でしょう。



科学について

科学に関しては、特に危機的な局面に及んでいると私たちは考えています。科学が非常に進歩し、それによって人類がかなりの進歩を遂げることができたことは、実際のところ誰も否定できません。もしも科学の発達がなかったならば、私たちはいまだに石器時代にいることでしょう。しかし、ギリシア文明期の科学の研究においては、対象の質的な面を理解することが行われていましたが、17世紀には量的な概念をより重視する研究が確立されることにより、非常に大きな変化が起きました。この変化は、経済の発展と密接に結びついています。機械論、合理主義、実証主義などは意識と物質を2つの全く異なる領域に分けてしまい、あらゆる現象を主観性のない計測可能な存在へと限定してしまいました。方法を問う「どのようにして」(how) が、理由を問う「なぜ」(why) を排除してしまったのです。過去数十年の間に行われた研究が、重要な発見をもたらしたことは事実ですが、経済の競争が他のすべてよりも優先されているように見え、現在私たちは、科学的物質主義の頂点に到達しています。

私たちは科学を私たち自身の意志に従わせるのではなく、自身を科学のしもべにしてしまっています。今日、単純な技術的な障害がこの非常に進んだ社会を危機に陥れることがありえます。それは質的なものと量的なものとの間の不均衡だけでなく、私たち人間と人間が作り出したものとの間にも、不均衡を引き起こしてきたことを証明しています。今日人間が科学の研究を通して追い求めている物質主義的な目的は、多くの人の精神を混乱させてしまう結果となりました。同時に、このような物質主義的な目的は、私たちを自分自身のソウルから、そして、私たち自身に内在するこの上なく神聖なものから遠ざけてしまいました。科学に

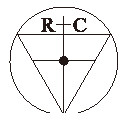


よって過剰に合理化されることは、目前に迫った危険であり、遅かれ早かれ人間を脅かすこととなります。実際に、意識よりも物質が優先される社会は、どんな社会であれ、人間の本

質にあるはずの高貴さを失わせてしまいます。したがって、そのような社会は、その社会が早々に消え去るように、自体に有罪の判決を下しているようなものです。そして、たいていの場合は悲劇的な状態で消え去るのです。

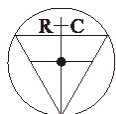
科学はある程度“宗教”のようになってしまっています。しかし、逆説的ですが、それはいわゆる物質主義的な宗教です。科学には、宇宙や自然や人類自身への機械論的なアプローチに基づいた独特の信条や教義があります。「目に見えるものだけを信じよ」と「科学の外には真実はない」というものです。それにもかかわらず、方法や手段（how）に関して行われた研究は、原因や理由（why）という疑問へと科学を導き、それによって少しずつ科学は、自体の限界を認識するようになってきています。そしてこの点で、神秘学と同意しはじめています。実際にはまだほんの少数ですが、一部の科学者たちは、〈創造主／神〉の存在を認めるに至っています。古代においては、科学と神秘学は非常に類似したものであったこと、そして科学者は神秘家であったこと、逆もまた事実であったことに注目しなければなりません。私たちが今後の数十年間にしなければならないことは、まさに、この二つの知識の道を再び一つにするために努力することです。

「知識」という問題をもう一度考え直すことが必要です。たとえば、ある経験を再現することができることにはいったいどんな意味があるのでしょうか。また、実証することのできない信条は、どんな場合も必ず間違っているのでしょうか。17世紀に起こった合理的な二元論を超えることが緊急の課題であるように思えます。というのも、真の知識というものは、二元論を超越し、拡大したものの中にあるからです。このことに関連して述べれば、人が〈創造主／神〉の存在を立証することできないということだけでは、〈創造主／神〉が存在しないと断言するのに十分ではありません。真実には多くの側面があります。合理性の名の下に、さまざまな側面のうちのひとつだけしか思い起こさないことは理性を愚弄することです。また、理性的



である、あるいは理性的でないということを正しく説明することができ
るでしょうか。科学が偶然の存在を信じている場合、科学自体は理性的
だといえるでしょうか。実際のところ、偶然を信じないことよりも、偶
然を信じるの方が、よほど私たちには理性的でないように思えるの
です。この話題に関しては、私たちの友愛組織は、偶然という一般的な
観念に、常に反対の立場であったことを述べておかなければなりません。
偶然という観念は、現実と直面したときの、安易な解決法であり、あき
らめであると私たちは考えています。アルバート・アインシュタインが、
「偶然」について、「〈創造主／神〉が匿名でありたいと思うときに採る
道である」と表現した見解に私たちは同意しています。

科学の進歩は倫理的な面でも哲学的な面でも、新しい問題を引き起こ
しています。以前は不治の病とされていた病気の治療法に関して、遺伝
学の研究が信じられないほどの進歩を可能にしたことは否定できませ
ん。しかし一方で、遺伝学の研究は、クローン技術によって人間を創造
する操作を許すことへの道を開いてしまったのです。このような生殖の
形態は、人類という種を遺伝学的に衰退させ、退化へと導くだけです。
さらにそれは、主観に基づいて選別の基準を決めることを必然的に意味
しており、その結果として優生学の問題に関わる場合には危険な要素を
はらんでいます。加えて、クローン技術による複製は、人間の肉体的、
物質的な部分だけを考慮しており、精神やソウルには特別な注意を払っ
ていません。以上のことから、このような遺伝学的操作は、人間の尊厳
を傷つけるだけではなく、人間の精神面、サイキック面、スピリチュアル
な面での健全さにも害を与えると私たちは考えています。この点で、
「良心を伴わない科学は、魂の破滅を招く」という格言に、私たちは同
意しています。人間が他の人間をふみにじる行為は、歴史の全体を通し
て悲しい記憶だけを残してきました。したがって、特に人間の、そして
一般的には生物全てのクローン複製技術に関する実験に自由を与えるこ
とは、危険なものに思えます。動物と植物の遺伝的構造に影響を
与える操作にも、私たちは同じような恐れを抱いています。

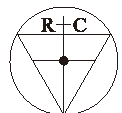


テクノロジーについて

テクノロジーの領域でもまた、急速な変化が進行していることに私たちは注目しています。人類のまさに夜明けの頃から、人々は生活の状態を改善し、作業をより効率的にするために、道具と機械を作ることを常に試みてきました。特に実用的な面では、この欲求にはもともと3つの重要な目標がありました。それは、人の手では作れないものを作れるようにすること、痛みや疲労を免れること、そして時間を節約することでした。もちろん、何百年もの間、あるいは何千年もの間、テクノロジーは人間の手作業と身体の働きを助けるためだけに使用されていました。しかし今日では、知的な領域においても、テクノロジーは私たち人間を助けてくれています。そのうえ、かなり長い期間にわたり、人間が直接操作することが必要な機械的なプロセスに限ってテクノロジーは用いられており、環境に対してはほとんど、あるいは全くといほど害を与えることはありませんでした。

今日、テクノロジーはあらゆる分野に普及し、現代社会の核を成しており、ほぼ不可欠なものになりました。テクノロジーの用途は幅広く、現在ではあらゆる種類のプロセス、たとえば機械、電気、電子工学、コンピュータなどの分野を作り上げています。不幸なことですが、機械が人間自身に対する脅威となってしまったことはテクノロジーの負の側面です。理想的には、機械は人間を助け、私たちから若痛を取り除くように意図されていました。しかし今や機械は、人間に取って代わりつつあります。しかも機械化によって、人間どうしの触れ合い、すなわち直接のスキンシップがかなり減ってきたという意味で、機械化の進行はますます社会における人間性の喪失をもたらしているということは否定できません。これに加えて、あらゆる種類の公害が工業化によって生じています。

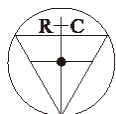
テクノロジーによって現在起きている問題は、人間の意識



の進化の速度よりも急速にテクノロジーが進歩してきたという現実から生じています。現代は物質主義が重要視されていますが、そこから脱却して、テクノロジーはヒューマニズム（人間主義）を代弁するものにならないと私たちは考えています。それを実現するためには、再び人間を社会構造の中心に置くことが不可欠です。それはつまり、経済に関して提起したことと同様に、機械が人間に奉仕するようにするよう立ち戻ることです。それをなし遂げるためには、今日の社会の基礎を形成している物質主義的な価値に対して、徹底的に問いかけ、見つめなおすことが必要です。そのためには、全ての人自身が自身の生き方を修正し、人生の質の向上を尊重しなくてはならないことや、時間にまつわる過熱した競争を止めねばならないことを理解することが必要です。しかし、自然と調和して生きるだけでなく、自分自身とも調和して生きる方法を人々があらためて学んだときにだけ、このようなことが可能になります。テクノロジーが人間を非常に困難な作業から解放し、それと同時に私たちが他の人と触れ合いつつ調和して進化することが可能になるように、テクノロジーが進歩していくことが理想なのです。

世界的な宗教について

世界的な宗教に関しては、現在2つの正反対の運動、つまり求心的な運動と遠心的な運動が起こっていると私たちは考えています。求心的な運動とは、内側を向いているという意味です。求心的な運動は、キリスト教、ユダヤ教、イスラム教、ヒンズー教、そして他の宗教における原理主義者のグループからなり、彼らは宗教的な源流への回帰を求めています。遠心的な運動とは、外部の世界に目を向ける動きであり、その結果、全般的に言えばその宗教の信条、特に宗教上の独断的で固定的な教義（ドグマ）を無視するということが起こっています。人々はひとつの信仰の体系の周囲に留まることに、もはや満足してはいません。たとえその宗教が「啓示（悟り）に基づいている」と言われているとしてもです。

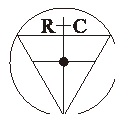


人々は今や、自身の体験から生じた思考体系の中心に自分を置きたいと思っています。ですから、宗教上のドグマを、人々

が機械的に受け入れることはなくなっています。信者たちは、宗教的な問題に関して、かなり批判的な感覚を獲得するようになっており、自分自身で検証することに自身の信念の基礎を置く傾向がますます強まっています。心の深奥の要求を満たすために、かつていくつかの宗教が生まれました。そのような宗教は細かく分かれていき、社会的にも文化的にもそれぞれの土壌によく根づき、社会や文化を豊かにすることに貢献してきました。今日、それは地下に張り巡らされた根でつながった多くの茂みになり、姿を変え続けています。しかし、時代精神が求めているのはそのような宗教なのでしょうか？

世界的な宗教が分派したり、それに代わって今日存在しているものは、似たような考えを持つ人々からなる団体や、同じような観念を共有する宗教的な共同体です。あるいは思想的な活動であり、ここでは教義は押しつけられるというよりも、むしろ提案されています。これらの団体は、自由意思に基づいて支持されています。このような宗教的な共同体や団体や活動がどのような内容であるかに関係なく、このような集団が増加していること自体が、人々が求めているスピリチュアルな探求の多様化を示しています。一般的に言えば、かつては尊重されてきた世界的な宗教が、もはや信仰を独占していないために、このような多様化の状況が生まれていると私たちは考えています。宗教が人々の疑問に答えることはますます困難になってきており、今では人々に精神的な満足を与えることができなくなっています。また、宗教自体が精神性を遠ざけるようにしてきたために、人々が宗教から遠ざかってしまったように思えます。精神性の本質は不変ですが、人間の進歩にできるだけ適合するようなさまざまな方法で、精神性はいつでも自体を表現しようとします。

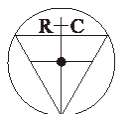
世界的な宗教が生き残れるかどうかを左右するのは、幾世紀もの間これらの宗教が採用してきた、非常に独断的な道徳と教理に束縛された信仰と、社会での地位を捨て去ることができるかどうかでしょう。もしこれらの宗教が存続することを望むのであれば、社会に適応することが不可欠です。人間の意識の進化や科学の



進歩を考慮しなければ、宗教は徐々に消滅することを自ら運命づけることになり、そしてその消滅には、これまで以上の人種的、社会的、宗教的な紛争が伴うことになるでしょう。いずれにせよ、世界的な宗教の消滅は当然避けられず、善悪の観念が世界中で共通化されていくことに影響を受けて、多くの宗教からひとつの普遍的な宗教が誕生し、人類の再生のために宗教が提供することのできる最も善良な部分だけが統合されることになると思います。さらに、〈創造主／神〉の法則、つまり自然界の法則、普遍的でスピリチュアルな法則を知りたいという望みが、いずれは、ただ単に神の存在を信じるという欲求に取って代わるものと私たちは考え、それによって、いつの日にか信仰が知識に道を譲ることになると私たちは考えています。

道徳について

道徳の意味は、以前にもまして曖昧になりつつあります。そして、ますます見向きもされなくなっているように思われます。社会的な秩序や、宗教的な規範、政治的な法令、あるいは他のさまざまな規則や、独断的な見解にさえも、道徳のほうはやみくもに追従してしまっている現状が見られますが、私たちの見解では、そのようなことはするべきではありません。しかし、私たちの仲間である多くの人々は、このような状況が今日の道徳に起こっているのに気づいています。そして、そのような状況を否定しています。道徳をないがしろにすることなく、人間のひとりひとりが、自身に対し、他の人に対し、また環境に対して敬意を払うべきであり、道徳はその敬意と結びついているべきであると私たちは考えています。自尊心とは自分自身の考え方に従って生きることであり、他人の考え方を認めない傲慢な態度のことではありません。他者に対する敬意とは、過去のあらゆる賢人たちが教えているように、単に、自分がしてもらいたくないことを他人に行わないということです。環境に対する敬意に関しては、自然を尊重し、将来の世代のために保護することは、

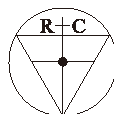


心から自然にあふれ出る強い願いであると特に申し上げておかななくてはなりません。この見地から考えれば、すべての人

が権利と義務の間のバランスを取ることが道德であり、権利と義務が均衡していることは、道德にヒューマニズムという性質を与えるものであり、独断的な意見を押し付けるものでは全くありません。

今説明した意味の道德というテーマから、私たちは教育の問題全体を考えるように導かれます。教育の問題は今や非常に危険な状態にあります。大部分の親たちは、教育の過程に全く関心を持っていないか、あるいは子供を適切に教育するのに必要な資格がもはやありません。多くの親たちはこのような欠点を埋め合わせるために、自分たちの責任を教師に押しつけています。しかし、それよりもまず考えるべきなのは、教師の役割です。教師の役割とは教えること、つまり単に知識を伝えることなのででしょうか。そうではなく、教育とは公民にふさわしい、倫理的な価値観を正しく教えることであるべきです。ソクラテスは、「教育とは魂のさまざまな美德を目覚めさせる術である」と考えていました。その美德とは謙遜、寛大、正直、寛容、親切などでした。この点において、私たちはソクラテスに同意します。このような美德が精神面に与える影響はすばらしいものですが、心のさらに深奥に与える影響は別にしても、これらの美德こそが、親たちや、大人たちが、子供たちにきちんと教えるべきものであると私たちは考えています。当然ながらそれは、たとえ親たち自身がこれらの美德を身につけていなかったとしても、少なくともこの美德を身につける必要性に気づいていなくてはならないということの意味しています。

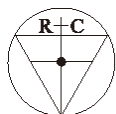
きっとみなさんもお存知のように、過去のバラ十字会員たちは物質的な錬金術を実践していました。それは錫や鉛のような卑金属を黄金に変換することでした。しばしば見落とされることがありますが、彼らは精神的な錬金術にも自身を捧げていました。現在のバラ十字会員は、精神的な錬金術を最も重要視しています。というのも、世界は今まで以上にそれを必要としているからです。精神的な錬金術とは、先ほど述べたさまざまな美德をしっかりと身につけるために、人間のあらゆる欠点をその反対の性質へと変換することです。



実際に、そのような美德が人間の尊厳の基礎を築いているのだと私たちは信じています。というのも、自分自身の考え方や言葉や行動に、そのような美德を表わすことができたときだけ、人間はその地位にふさわしいと考えているからです。ひとりひとりの宗教的信念や政治的観念、あるいは他の思想がどのようなものであっても、全ての人がこれらの美德を身につけようと努力するならば、間違いなくこの世界は今よりも良くなっていきます。もしそうなれば、人類は人類自体を再生することができますし、再生しなければなりません。しかしそうするためには、ひとりひとりの人が、道徳と精神性という面で生まれ変わらなくてはなりません。

芸術について

芸術に関しては、過去数世紀の間に、そして特に最近の数十年間に、合理性を求め傾向が強まり、芸術をより抽象的な方向に向かわせると私たちは考えています。このことは、芸術を相反する2つの傾向、エリートの芸術と大衆の芸術に分かつことになりました。エリートの芸術は抽象によって表現され、ほとんどの場合、その専門家だと自称している人や、そのように言われている人だけにしか理解されていません。それに対する当然の反作用として、大衆の芸術はしばしば極端に具象主義的な手法を取り入れ、写実的な描写の表現を強調して、エリート芸術の傾向と対立しています。しかし逆説的に思えるかもしれませんが、どちらも物質主義のさらなる深みに陥ってしまっています。というのも反対のもの同士が実は同じものになってしまうということは、多くの場合真実だからです。このように芸術は、人間の活動の他のあらゆる領域を反映して、構造的にも、そしてイデオロギー的にも物質主義的になってしまっています。最近の芸術は、ソウルから生まれ出る強い願いよりも、むしろエゴ（自我）から生まれる衝動を描写していますが、それは残念なことです。

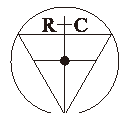


真に靈感を受けた芸術とは、〈神聖な領域〉の美しさと純粹さを、人間の領域で描写することであると私たちは考えてい

ます。この見地から言えば、騒音は音楽ではなく、単に塗り付けることは絵画ではなく、単にハンマーを打ちつけることは彫刻ではなく、でたらめに動くことは舞踏ではありません。これらの種類の芸術が、一時的な何らかの流行を表現することだけに関わっていないならば、無視することのできない社会的なメッセージを伝達することができる重要な表現の手段となります。もちろん私たちは、そのような表現の手段の価値を理解することができます。しかしそれを単に「芸術的」と呼ぶことはふさわしくないように、私たちには思えます。芸術が人間の再生に関与するためには、自然で普遍的で、かつスピリチュアルな元型から得られるインスピレーションを芸術は描写しなければならないと私たちは考えています。それは芸術家たちが非常に平凡な固定概念へと「下降する」のではなく、むしろ、これらの元型へと「上昇する」ことを意味しています。同時に、芸術自体が美の本質や価値を追求する目的を持ち続けることが絶対に必要です。私たちの見解では、芸術が意識をより向上させることに本当に貢献し、〈宇宙の調和〉の人間による表現になるためには、この2つの重要な条件を満たさなければなりません。

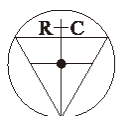
人間同士の関係

人間同士の関係において、人はますます利己主義へと進み、利他主義のもとに行動する余裕をますます無くしてしまっていると私たちは考えています。もちろん連帯感の高まりが起こることもあります。しかしそれは、洪水、嵐、地震などのような大災害の際にだけ、ときたまそうなるだけです。普段は、「すべての人が自分自身のために」という残念なポリシーが優先されて、人々は行動しています。私たちの見解では、このような個人主義の増加もまた、今日の現代社会にはびこっている過剰な物質主義の結果です。とは言うものの、結果的に生じる孤立感は、他の人との交流を再び深めたいという願いや必要性をいずれもたらすこととなります。そうでなければ、その孤独を契機に、全ての人々が自分自身の内面をもっと見つめるようになり、やがては精神性に向き合うようになることを私たちは願っています。



暴力が一般に広まっていることもまた、とても心配に思っています。もちろん、残念ながら暴力はいつの時代にもあったのですが、しかし現在は個人の暴力がますます増えてきています。さらに深刻なことに、以前よりも若い世代に顕著になっています。この21世紀の初頭において、ある子どもが別の子どもを、いかなる明らかな良心の呵責もなく殺すということが起こっています。現実社会の暴力に加えて、映画やテレビの画面を占めている虚構の暴力が存在しています。現実の暴力が虚構の暴力を刺激し、虚構の暴力が現実の暴力をさらに助長し、止めなくてはならない悪循環を生み出しています。暴力にはあまりにも多くの原因があること、たとえば社会全体の貧困、家族の崩壊、復讐心、支配欲、不公平感等があることは否定できません。しかし、その中でも最悪の誘因は、まさに暴力そのものです。明らかに、このような暴力の文化は社会にとって有害であり、建設的ではありません。特に、人類が歴史上初めて、地球規模で自体を破壊する手段を持っている現状ではそうです。

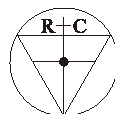
現代の逆説のひとつですが、このコミュニケーションの時代に、ひとりひとりが実際には、もはやお互いに意思を伝達し合っていないことに、私たちは今さらのように気づかされます。家族でありながら、今では互いに会話をしていないのです。ラジオを聞いたり、テレビを見たり、インターネットを見たりするのにあまりにも忙しいからです。もうひとつの確かな事実がより広く注目を集めています。それは、電子的な通信手段が普通の意味伝達的手段に取って代わってしまったことです。それによって、人間は孤立し、先ほど述べた個人主義が助長されています。私たちの意味するところをどうぞ間違えないでください。個人主義は、自立して責任を持って生きるための当然の権利であり、私たちの考えでは、全く非難されるべきものではありません。それどころか正反対なのです。しかし、それが他人を否定することに基づく生活様式になったときには、個人主義は特に有害に思えます。個人主義が家庭と社会構造の崩壊の一因となっているからです。



矛盾しているように思えるかもしれませんが、現在、人々

の間にコミュニケーションが欠如している原因の一部は、過剰な情報の結果であると私たちは感じています。もちろん私たちは、伝える権利や伝えられる権利に疑いを持っているのではありません。というのもこの2つの権利は、あらゆる真の民主主義の柱であるからです。それにもかかわらず情報は、その反対に情報離れを生じるほどに、過剰であると同時に、押し付けがましいものになってきたように思われます。また、人間が危険にさらされているという状態に主に情報の焦点が当てられており、人間の行動の否定的な側面を強調しすぎていることを私たちは残念に思っています。悲観的な見方や悲しみや絶望を助長するだけならまだしも、最悪の場合は、疑いや不和やうらみをも増幅させています。世界を醜くしているものを指摘するという正当な必要性はありますが、それでも、世界を美しくすることに貢献しているものを明らかにすることにこそ、すべての人の最大の興味があります。これまで以上に、世界は楽観的な見方や希望や協調を必要としているのです。

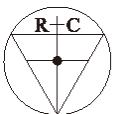
人間が人間を理解することは、大いなる前進の一步を踏み出すことになることでしょう。それは20世紀に経験した科学の進歩やテクノロジーの発達よりもさらに根本的なものになります。そのために、すべての社会集団は、人々が実際に顔を合わせる機会を持つように働きかけていくだけではなく、世界に向けて集団自体を開かれたものにしていかなくてはなりません。そうすることによって、バラ十字会自体もすべての人を「世界市民」にすることを目的とする、人道的な友愛組織の活動を守り続けています。すべての人を「世界市民」にするということは、人種的、民族的、社会的、宗教的、政治的なあらゆる差別意識や差別状態を終わらせることです。結果的に、そうすることが団結と協力に基づいた〈平和の文化〉の実現を進めることとなりますが、バラ十字会員は常にそれに身を捧げてきたのでした。人類は本質的にただひとつであり、人類の幸せは、誰一人として例外なく、すべての人がより幸せになることによるのみ達成されるのです。



自然と人類の関係

自然と人類の関係に関して、全体として人間がこれほど自然に対して害を及ぼした時代はかつてなかったと私たちは思っています。人間の活動が、環境にますます荒廃をもたらしていることは誰の目にも全く明らかなことでしょう。さらに、人類という種が生き残れるかどうか、自然のバランスを尊重する人間の能力にかかっているということも明らかです。食物に対して行われている生物学的操作、汚染物質が広く使用されていること、核廃棄物の蓄積を十分に管理しないことによって、文明の発展は多くの危険を生み出してきていますが、これらの例は重大な危険のほんの一部でしかありません。以前は専門家だけが自然保護に関わっていましたが、自然保護は、すなわち人類を保護することでもあり、今やすべての人の責任となっています。さらに自然保護は、今や世界規模の最大の関心事となっています。まさに自然に対する私たちの概念が変化してきており、自分自身が自然の一部であることをさらに理解するようになるにつれ、世界的な自然保護はなおさら重要になっています。人間は自然を自分たちが望む状態にすることができるのですから、現代の私たちはもはや「自然をあるがままにする」とは言えなくなっています。

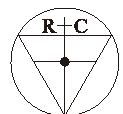
現代の特徴のひとつはエネルギーの大量消費です。もしエネルギーの消費が理性的な判断のもとに管理されていれば、この問題は本来、それほど心配される事態にはならないはずです。しかし石炭、ガス、石油などの天然資源が過剰に採掘され、徐々に使い果たされつつあります。さらに、原子力発電のような一部のエネルギー源は、克服することが非常に困難な深刻な危険性を生じています。また、最近の対話の試みにもかかわらず、ガスの放出による温室効果、砂漠化、山林の乱伐、海洋汚染などのような危険に対して、自然破壊をやめさせようという明確な意志がないために、十分な保護の対策が行われていません。このような環境破壊は、人間を極めて深刻な危機に直面させるという事実に加えて、個人も、社会も、全く成熟していないことを表しています。一部の専門家の主張とは異なりますが、暴風雨や、洪水など現



在の異常気象は、あまりにも長い間、人類が私たちの惑星に与えてきたダメージの結果であると私たちは考えています。

もうひとつの重大な問題、水の問題に、将来私たちは直面し、その影響はますます増大していくであろうことは確実です。生命の維持と発達に水は欠かすことのできない要素です。どのような形にせよ、すべての生物は水を必要としています。私たちの身体の70パーセントを水が占めているという理由だけをとっても、人間もこの自然の法則の例外ではありません。しかし今日、清浄な水を手に入れることができるのは、世界の住人のおよそ6分の1に限られています。この比率は地球規模の人口増加と大河や小川の汚染のために、この先50年もしないうちに、さらに4分の1になってしまう可能性があります。今日では、有名な専門家たちの大多数は、「黒い黄金」つまり石油よりも、「白い黄金」と呼ばれる水の方が、21世紀の重要な資源になるということに、意見が一致しています。それは、水があらゆる紛争の原因となる可能性があるということでもあります。ですから、世界的なレベルで、この問題を認識することが不可欠です。

大気汚染もまた、すべての生物、特に人類に対して、深刻な危機を引き起こしています。産業や冷暖房や輸送は、大気を汚染する原因となっており、潜在的な健康被害が生じています。都市部は大気汚染の影響を最も受けており、都市化が進むほど、その脅威は増大します。このため、都市の肥大化は社会のバランスを崩す、見過ごすことのできない危険性をはらんでいます。都市の大型化に関して、私たちはプラトンの助言に同意しています。プラトンについては言及しましたが、彼は何世紀も前に以下のように述べています。「都市はその統一性が維持される点までは拡大することができるが、それを越えてはならない。」都市を過度に巨大化するような政策では、私たちがさきほど定義したヒューマニズムを推進することはできません。巨大化によって、大都市には必然的に争いが起こり、スラム化や治安の悪化が生じます。

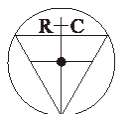


動物への人間のふるまいもまた、自然と私たちの関係のひ

とつです。動物を愛し尊重することは、私たちの義務です。すべての生き物は、〈地球〉上に表現されている生命の鎖の一部であり、すべての生き物が進化の推進者なのです。動物たちもまた、それぞれにふさわしい〈創造主／神〉のソウルが宿る乗り物なのであり、〈創造主／神〉の計画に関与しているのです。そして、動物の中で最も進化しているのは人間であり、その進化は現在も進行している過程にあるとすることができます。そのように考えれば、多くの動物が飼育され、殺されている状況は正しくないことがわかります。生体解剖は、残酷な行為であると私たちは考えています。一般的に言って、友愛の輪には、生命が与えられている全ての生き物が含まれなくてはならないと私たちは考えています。ですから、私たちは、ピタゴラスが言ったとされている以下の言葉に同意します。「自分より下等だと考える生き物を、人間が無慈悲に殺し続けている限り、人間は健康も平和も知ることはできない。人が動物を殺戮している限り、人は互いに殺し合う。殺害と苦悩の種を蒔くものは誰であれ、結果として喜びと愛を収穫することはできない。」

人類と宇宙の関係

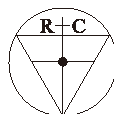
人類と宇宙の関係は、相互依存に基づいていると私たちは考えています。人は地球の子どもであり、そして地球は宇宙の子どもです。したがって、人は宇宙の子どもなのです。人間の肉体を構成している原子は、自然界で生じ、〈宇宙〉を構成しているものと同じものです。このことから、天体物理学者は「人は星々の子どもである」と言っています。人は宇宙の恩恵を受けていますが、宇宙もまた人間に多くを負っているということ、もちろんその存在自体にではなく、存在の理由に対する義務を負っているということにも注目しなければなりません。たとえば、もし人間が宇宙をじっくりと見つめることができないとしたら、宇宙はどんなものになってしまうのでしょうか。もし人間の意識が宇宙のことを理解できないとしたら、もし人間のソウルが、宇宙の素晴らしさをこの世界に映し出すことができないとしたらどうでしょうか。宇宙と人間はお互いを知るために、もっと言えば受け入れるために、



お互いを必要としています。このことは私たちにかの有名な格言を思い起こさせます。「汝、自身を知れ。そうすれば汝は、宇宙と神々を知るのであろう。」

それでもなお、この宇宙が創造されたのは人間のためであると考えべきではありません。私たちバラ十字会は、人間を〈創造主／神〉の計画の中心であると考えてはいません。そうではなく、人間に関心を寄せているのは人間そのものです。私たちの見解では、地球上に人間が存在していることは、単なる偶然の結果ではありません。むしろそれは、一般には〈創造主〉あるいは〈神〉と呼ばれている〈普遍的知性〉に由来する意思の結果です。〈創造主／神〉は、超越的であるため知覚することも理解することもできないものですが、〈創造主／神〉が〈創造〉を通して表現しているさまざまな法則はそうではありません。さきほど述べたように、これらの法則を学習し、自分自身の物質的な幸せや精神的な幸せのためにそれを応用することは、義務であるというほどではないとしても、そうする能力が人には備わっています。さまざまな法則を学習し、応用することに、自分自身の存在理由があるだけでなく、そこには幸せもまた存在すると私たちは考えています。

人間と宇宙との関係では、地球以外のどこかに、生命が存在するのではないかという疑問が生じます。地球外の生命は確かに存在していると私たちは考えています。宇宙にはおよそ千億の銀河があり、それぞれの銀河にはおよそ千億の恒星があります。ですから、宇宙にはおそらく、私たちの太陽系とよく似た無数に多くの太陽系が存在しているものと思われる。そう考えると、私たちの惑星にだけ生き物が住んでいると考えることは、一種の自己中心主義であり、不合理な考え方であると思えます。他の世界に生きているさまざまな生命の中には、おそらく地球上の生命より進化しているものもあれば、それほど進化していないものもあるでしょう。しかし、どの生命もみな、同じ〈創造主／神〉の計画の一部であり、〈宇宙の進化〉に関与しています。地球外の生命が人間と接触できるのかどうかについては、いずれ



はそうなるだろうと私たちは考えています。しかしこれを待つことに多くの時間を浪費する必要はありません。私たちには、他に優先すべきことがあるからです。いずれにせよ、地球外生命と接触する日はいずれ訪れるでしょう。そしてそれは前例のないできごととなるでしょう。そのとき、まさに人類の歴史は、〈普遍的な宇宙の生命〉の歴史と融合することになるでしょう。

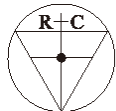
後書き

EPILOGUE

親愛なる読者のみなさん、

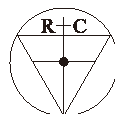
以上が、この宣言書により、私たちがみなさんにお伝えしたかったことです。もしかしたら、この宣言書の内容は不安をあおりすぎるものと思われたかもしれません。しかし、バラ十字会の哲学に基づいて、私たちは理想主義者であり、同時に楽観主義者でもあることをみなさんに述べておきたいと思います。つまり私たちは、人類を信頼しており、その運命を信頼しているのです。科学やテクノロジー、建築や芸術、文学やその他のあらゆる分野で、人間が作り出してきた、非常に役に立つ実用品や美しい作品を思い起こしてみると、そして、驚きや同情や愛などを感じたり、表現したりすることができるというとてもすばらしい、人間の洗練された感情について考えるとき、人間は本来神聖なものであること、そして、より偉大な善に向って、自分自身を乗り越えていく能力があることを私たちは疑うことはできません。そのように考えると、もしかすると非現実的な理想主義者だと思われるかもしれませんが、平和で調和が保たれ、しかも友愛に満ちた星に地球を変えていく力を人類が持っている私たちは信じています。そして議論の余地なく、それは人類の今後の生き方にかかっているのです。

現在の世界の状況は望みがないわけではありませんが、非常に憂える状態です。私たちが最も心配しているのは、人類の状況というよりも、私たちの惑星の状態です。人間のスピリチュアル



な面での進化ということを考えると、時間は全く重要ではないと思っています。人間のソウルは不死であり、スピリチュアルな面での進化をなし遂げるためには、十分に長い永遠とも言える時間があるからです。しかし一方で地球は、少なくとも人類のための生存環境としては、今まさに危機に瀕しています。地球にとっての時間は尽きつつあり、21世紀には地球の保護が絶対に必要であると私たちは考えています。その目的のためにこそ、政治、経済、科学、テクノロジーそして他のすべての人間活動の分野で、人類は努力を結集しなくてはなりません。自然界のさまざまな法則、より広い意味では〈創造主／神〉の法則と調和して生きることによってだけ、人間は幸せを見出すことができるということを理解するのは、本当にそんなに難しいことなのでしょうか。また人間は、私利私欲をより純粹で気高いものに変えていく能力を持っていると考えることはそんなに不合理なことなのでしょうか。いずれにしても、もし人間が物質主義を追求し続ければ、最も暗い予言が実現し、誰一人として逃れられなくなります。

人それぞれの政治的観念や宗教的信念や哲学的確信がどんなものであろうと、それはたいした問題ではありません。どんな形であれ、不和分裂をしている時間はもはやありません。協調の 때가、今や熟しています。すなわち人類全体に共通する善へ尽くすために、多少の相違があっても、人類は今ひとつにならなければならないのです。ですから、私たちの友愛組織には、キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教徒、仏教徒、ヒンズー教徒の方々もいますし、精霊信仰の方も、宗教を持たない方も、不可知論者の方もいます。また、あらゆる社会的階級に属する人がいますし、よく知られているさまざまな政治的運動を代表している人も含まれています。バラ十字会では、男性も女性も完全に同じ地位にあり、それぞれの会員には同じ権利が与えられています。ひとりひとりに相違がある中での協調が、私たちの理想と〈エグレゴア〉(精神的な集合的意識)に力を与えてきました。これは、私たちが最も大事に育んできた美德が「寛容」であること、言い換えれば「ひとりひとりが異なっているという権利」であるという事実の反映です。



このことで、私たちは自分たちを賢人とは呼びません。というのも知恵は他の多くの徳を包含しているからです。むしろ、私たちは自身を哲学者 (philosopher)、その英語の本来の意味で「知恵を愛する人」であると考えています。

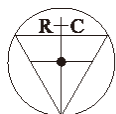
この宣言書「バラ十字友愛組織の姿勢」を封印し、そこに私たちの〈友愛組織〉の印を押す前に、プラトンの言った理想国家としての「ユートピア」と同様の意味で、「バラ十字的ユートピア」と呼ぶことのできる私たちの願いを下記に表明し、この宣言書を終えることにします。私たちはいつの日か、人類のより素晴らしい善のために、この〈ユートピア〉が実現することを、すべての人々の善意に訴えていきます。おそらくそのすべてが実現する日は来ないでしょう。しかし、もしすべての人がこの理想を大切にすることに努め、それにしたがって行動するならば、世界はそのときに、少なくとも、今より良い世界へと変わることができます。

バラ十字的ユートピア

ROSICRUCIAN UTOPIA

すべての人の〈創造主／神〉、すべての生命の〈創造主／神〉よ、人類の未来に私たちは次のような夢を見ている。

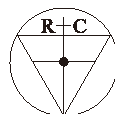
- ◆ 政治家は、心の底からヒューマニズムの上に立ち、人類に共通する善に尽くすために努力している。
- ◆ 経済の専門家は洞察力を持って、すべての人の利益のために、国家の財政を管理している。
- ◆ 科学者は精神的な面を大事にし、〈自然の書〉の中にインスピレーションを求めている。
- ◆ 芸術家はインスピレーションにあふれ、作品の中に〈創造主／神〉の計画の美と純粹さを表現している。



- ◆ 医師は同胞への愛を動機として、ソウルと肉体の両方を治療している。
- ◆ すべての人々が幸せに人生を送るために必要なものを持ち、苦痛と貧困は消滅している。
- ◆ 仕事は骨の折れる作業ではなく、成長と幸せの源とみなされている。
- ◆ 崇拜されるために造られた建造物の中でも、自然は最も美しい建造物であると考えられている。そして動物は、進化の道の途上にある私たちの兄弟と考えられている。
- ◆ 世界政府が存在しており、すべての国家の指導者によって構成されていて、すべての人類の利益のために働いている。
- ◆ あらゆる人の心の深奥に存在する尊さを敬うことが最高の規範、生き方とみなされ、その生き方は世界共通の宗教から生じている。その宗教は〈創造主／神〉への信仰に基づくというよりは、むしろ神聖な法則に関する知識に基づいている。
- ◆ 人間関係は愛、友情、友愛に基づいている。そのために全世界は、平安と調和のうちに保たれている。

So Mote It Be!

(そうありますように)





宣言書

MANIFESTO

翻訳：才野奈緒、東京、翻訳委員

監修：本部主宰 F. R. C. 本庄敦

第7版発行 2011年10月18日

発行者 バラ十字会日本本部 AMORC

© バラ十字会 AMORC 世界総本部

上記標章のもとに、この副読教本の著作権は、バラ十字会 AMORC 世界総本部 (the Supreme Grand Lodge of the Rosicrucian Order AMORC) に属します。その標章は法的に保護されており、それ自体が、この冊子の表紙と本文の内容の制作物、印刷物、コピー、写真、タイプ複写の全てを保護しています。

バラ十字会日本本部 AMORC は非宗教・非営利の世界的教育友愛組織であり、皆様のスピリチュアルな探究のための通信講座を 1977 年より開講しています。スピリチュアリティを高め、潜在能力を開発することで、皆様は、自身に内在する真の魅力と能力を発揮することが出来るようになります。集中力、直観力、問題解決能力が飛躍的に高まり、人生はより豊かで有意義なものになります。この分野において、幾世紀もの間リーダー的存在であった世界的な組織であるバラ十字会を、皆様の信頼できるガイド役とされてはいかがでしょうか。人生に決して偶然はないこと、人生で起きるできごとの宇宙的な意味、物質とソウル（魂）の関係、そして、自身の精神の奥深くを探究する壮大な冒険があなたを待っています。そのために会員に提供される教材は、神秘学を核とした、幅広い、私たちが知る限り世界で唯一のものです。学習は自宅で行うことができ、週 1 回 30 分程度分かりやすく書かれた教材を読み、簡単な実習を行います。生体のエネルギーを増強しバランスさせる呼吸法などの具体的テクニックを学び、自身と身近な人のために役立てることが出来ます。また瞑想を始めとする様々なテクニックによって〈宇宙〉との調和をなしとげ、健康を改善し、オーラを強く美しくして、徐々に宇宙意識と呼ばれる〈絶対〉との合一にも近づいて行くことが出来ます。また教材には、物理学、生理学等の最新の科学の成果や、多方面にわたる神秘家、哲学者の探究が反映されていて、これらを効率よく理解することが出来ます。

学習課程の構成、得られる効果、受講のための手続き方法だけでなく、あなたの人生を全く新しい視点から見るための案内資料「人生を支配する」を無料でプレゼントいたします。ご希望の方は下記に資料をご請求ください。

〒 173-0005 東京都板橋区仲宿 53 - 2 - 101

バラ十字会日本本部 AMORC 事務局 MF 係

TEL：03-5944-1325（平日 10:00～17:30）

FAX：03-5944-1326（年中無休）

<http://www.amorc.or.jp/>